田植時期到来

近年、田植え時期の気温が低いことが多くなっています。天気予報などを確認し、水管理など下記の注意点を参考に栽培に取り組んでください。

土づくり

高温に打ち勝つ稲づくりのためには深耕を行ったり、アヅミンや土力の達人等の土壌改良資材を投入し、土づくりを図ることが重要です。土づくりをすることにより、根が張りやすい土になり、夏の高温など天候に影響されにくくなります。

箱剤について

病害虫防除のため必ず使用してください。「ブーンレパード箱粒剤」（いもち・紋枯病、害虫防除）に加え、同様に長期間効果が持続する「ブーンパディード箱粒剤」（いもち病・害虫防除）を中心に従来からの「ブイゲットアドマイヤー箱粒剤」も含めいずれかを使用してください。

田植え後の水管理について

初期生育、特に分けつの発生は地温と活着に大きく左右されます。地温が低いと分けつが抑制されてしまいます。田植え植付けの深さは2cmから3cmが良いと考えられます。1cmの浅植えでは浮き苗や除草剤の薬害発生の原因になりますし、4cm以上の深植えですと地温が低いところに根があるため分けつを取りにくくなります。また水管理も同様です。深水ですと地温が上がりにくくなるため分けつしにくくなります。晴れの日はできる限り浅水管理を意識してください。ただ雨や風の強い日は苗を守るため深水管理にしてください。

もう一つのポイントは活着についてです。苗は弱いため田植え後活着に時間がかかります。その間養分吸収をしにくくなります。そこで田植え前に苗箱へのトミー液肥の散布をお勧めします。水やり時、ジョロいっぱいにキャップ一杯を目安に散布してみてください。液肥のため吸収が早く根付きを良好にします。初期生育が促進され良質茎ができやすくなります。新潟などの寒冷地の米どころでも使われている技術なので効果には期待が持てます。

また、活着後は浅水管理（2～3cm）を行い、水温と地温の上昇を図って初期生育の促進に努めてください。

田植え後、長期間水をため続けていると、土中にガスが発生することがあります。ガスが発生すると根を傷め、下葉に赤い斑点が発生するなど生育が悪くなり、秋落ちの原因となります。状況を見て落水して土壌中に酸素を供給できるようにしてください。

除草剤について

安定した効果を得るためには次のことが重要です。

① 田面を均平にする
② 代かきを丁寧にする
③ 気温の低い日は散布を避ける
④ 除草剤の使用量・使用時期を守る

特に初期除草剤は3～4日かけて地表に処理層をつくり、小さな雑草を枯らし、発芽を抑えます。散布後7日間は落水やかけ流しをしないでください。もし田面が露出しそうな場合は、処理層を壊さないよう、ゆっくり差し水をしてください。

注 意

除草剤は種類によって使用基準が異なります。使用基準を確認してお使いください。
また初期の水管理は除草剤との兼ね合いをみて行ってください。除草剤散布後の7日間での水管理は上記の内容を優先してください。
※2回処理体系の1回目薬剤、ショキニーフロアブルは田植え日からの使用となり、代かき前には使用できませんのでご注意ください。

箱処理剤と除草剤の間違いに注意！

苗箱にかける箱処理剤を、間違えて1kg除草剤をかけてしまう事故が毎年発生しています。新たなパッケージの農薬もありますので、箱処理剤か除草剤かよく確認してからご使用ください。